〔コラム〕

NLD と USDP の支持者はだれ？
―ヤンゴンとミャウンミャでみた総選挙―

2015 年 11 月 8 日のミャンマー総選挙は，半世紀におよぶ国軍支配からの転換をかけた歴史的イベントであった。ミャンマー・ウォッチャーとしては，このイベントを見逃すことはできない。私は大学での仕事を調整し（後回し？），11 月 5 日の夜行便で羽田を飛び立った。そして，翌 6 日の朝にバンコク経由でヤンゴンに到着すると，すぐに空港から街中の NLD 本部に向かった。ヤンゴンではすでに日常となった渋滞に巻き込まれながら，車窓から街の様子を眺めた。しかし，選挙カーに出会うこともなく，街中に候補者のポスターが貼られているほかには，意外なほど選挙戦を感じることはなかった。

結局，党本部に到着したのはすでに 11 時近かったが，中央執行委員のひとりが待っていてくれた。すぐに選挙キャンペーンを見に行きたいとお願いすると，今日はもう選挙運動をしないという。投票日の前日の 7 日はサイレント・デーということで，選挙キャンペーンが禁止されていることは知っていた。しかし，NLD はその前日の 6 日にも選挙運動をしないことを決めたという。これは選挙戦が過熱し，選挙違反や暴力が発生することを警戒した措置であった。NLD がいかに慎重に選挙活動を進めていたかがうかがえる。

しかたなく私は友人と合流して，ヤンゴン郊外の運動場で開催されている連邦団結発展党（USDP）の集会に行くことにした。集会には USDP のカラーである緑色の服を着た人々が集まっていた（写真 2-A）。人数はそれなりにいたが，正直あまり熱気を感じない。参加者の T シャツの背にはヤンゴン郊外の郡の名前が印刷されている。そうした郡から USDP が仕立てたバスやトラックで，「動員」された人々がほとんどだからであろう。自家用車で来ている人は少なく，低所得層の労働者や農民が多い印象である。

この運動場では前の週に NLD も集会を開いていた。それにも参加していた友人は，明らかに雰囲気がちがうという。私も週刊誌でその時の写真をみたが，参加者数が圧倒的に多く，人々の表情から熱気を感じとることができる。友人によれば NLD の集会には自家用車で参加した人が多く，大変な渋滞が起きたという。この集会だけみれば，NLD の支持層は教育水準が高く資産をもっている中間層が多く，USDP の支持層は

動員がかけやすいということもあるだろうが，教育水準が低く低所得層が多いということになる。

＜写真 2-A　ヤンゴン郊外で開催された USDP の集会＞
USDP の党のカラーは緑色である。集会参加者の多くは USDP から支給された緑色の服を着ている。広場の中央にはテインセイン大統領（USDP 党首）の写真が立てられている。（筆者撮影，2015 年 11 月 6 日）。

翌 7 日，私は別の友人に同行し，ミャウンミャへ行くことにした。本文で指摘したように，ヤンゴンには地元に戻らないと投票できない地方出身者が多くいた。ミャウンミャはヤンゴンから西へ車で 4～5 時間のエーヤーワディー管区域の地方都市である。コメの集散地として有名で，街には精米所が集積している。

私は午後遅くミャウンミャに到着すると，すぐに郡の選挙管理委員会へと向かった。以前は外国人が郡の役所に入ることは事前の許可がなければまず不可能であったが，今回はだれにも止められずに入ることができた。軍政時代とのちがいを実感した。選挙管理委員会の委員は翌日の選挙の準備で忙しくしていたが，私の突然の訪問を快く受け入れてくれた。私が面会した委員は委員長をはじめ全員が民間出身者であった。委

員長は高校の元校長，委員のひとりは大学の元講師，委員のもうひとりは精米所の経営者であった。政府各省の役人も選挙管理委員会のメンバーになっているが，この日は土曜日で役所が休みであったためか民間出身の委員としか会えなかった。私は事前に選挙管理委員会に対するメディアのさまざまな批判を読んでいたが，ここでのヒヤリングによりほとんどの疑念は解消した。今回の総選挙が自由・公正に行われるであろうとの心証を得た。

ミャウンミャ郡は上下院ともに USDP と NLD の一騎打ちであった。USDP の下院の候補者は建設相，上院の候補者は入国管理・人的資源相でふたりとも現職大臣であった。一方，NLD の候補者はいずれも新人であった。USDP 候補者は資金力にものをいわせ，大々的な選挙キャンペーンを展開したようである。これに対して，NLD 候補者は足で稼ぐ地道な選挙運動を展開した模様である。おそらく本書の第 1 章が描いたような，両党による異なるタイプのキャンペーンが行われたのではないかと推察する。

私はこの日の夕方に USDP の下院の候補者にゴルフ場で，夜には NLD の下院の候補者に喫茶店で会うことができた。NLD の下院の候補者は地元のビジネスマンや NGO 関係者などと一緒に談笑していた（写真 2-B）。こうした人々が資金力も組織力もない NLD の新人候補を，勝手連的に支えたようである。結果は，下院が NLD 候補者 8 万 1147 票（得票率 52.7%），USDP 候補者 6 万 3785 票（得票率 41.4%），上院が NLD 候補者 8 万 785 票（得票率 51.8%），USDP 候補者 6 万 3548 票（得票率 40.75%）で，いずれも NLD 候補者が勝った。

＜写真 2-B　選挙前夜，喫茶店で支援者と談笑する NLD 候補＞
NLD の新人候補者は右からふたり目。ヤンゴンで医科大学を卒業した医者であるが，現在は地元でビジネスをしている。選挙前日のこの日は選挙活動が禁じられていたが，夜に支援者と喫茶店で談笑していた。（筆者撮影，2015 年 11 月 7 日）。

ところで，私の友人の家族は全員 NLD 支持者であった。とくに友人の母親は熱烈な NLD 支持者で，USDP の選挙不正を批判していた。11 月 8 日の投票日の午後遅くご家族に招かれて昼食をご馳走になっていた時，家に電話がかかってきた。電話に出た友人のお母さんがえらい剣幕で怒っていたので，あとでなにがあったのかを聞いた。その電話はご家族のところに住み込みで働いている村落出身のお手伝いさんを，投票のためにすぐに村に寄越してほしいという村落関係者からの依頼であったそうである。お母さんは若い娘（お手伝いさん）を夕方ひとりで村に返すのは危ないからできない，と憤っていたのである。おそらくその村落では USDP が強く，今になって票集めをしているのだと指摘した。お手伝いさんが村に戻って投票すれば，周囲のプレッシャーもあり USDP に入れざるを得ないということなのであろう。ここでも USDP が村落部で強く，NLD が都市部で強い構図がうかがえる。

友人の家族は中国系とカレン民族の混血である。街の郊外に中規模の精米所を所有し，コメの商売をしている。街の中心地にある自宅は大きな 2 階建てのコンクリート造りで，1 階ではお店も開いている。この家族の精米所やお店は，1962 年以降の軍事政権とそれを継いだ社会主義政権下で政府に接収されたことがある。大きなお店を政府に取られてしまったので，裏口で小さいお店を始めたこともあったという。友人の父親は婿養子なので，母方の家系が資産家であったようである。直接そうと聞いたわけではないが，お母さんの NLD への熱烈な支持，USDP・国軍への厳しい嫌悪はこの経験に由来するのではないかとも考えた。

すなわち，独裁国家による強制収奪，財産権侵害に対する恐れと怒りがNLD支持の背景にあるのではないか。地元の精米業者やビジネスマンが公共事業をもってくる現職の建設大臣を支持せずに，NLD候補者を支持するのも同様な理由ではないだろうか。とはいえ，軍政下で財産権を侵害されたのは，農地を接収された農民も同じである。独裁国家の怖さは農民こそ骨身にしみているはずだろう。では，なぜ村落ではUSDPが強いのか（これも証明されたわけではないが）。結局，国民の投票行動についてはまだわからないことが多い。ちなみに，友人の父親は建設大臣のゴルフ仲間で，大臣が地元に戻るたびに一緒にプレーする仲良しである。しかし，友人であるから票を入れるわけではないようだ。こうしたミャンマー人の融通無碍（ゆうずうむげ）さも，彼らの投票行動の説明を難しくする要因である。

（工藤年博）